

戦時に実現した福祉

— 板東俘虜収容所を題材として —

Wellbeing during a time of war
: The Bando Prisoner-of-War Camp

篠原拓也

【要旨】

本稿は日本福祉文化学会「研究・調査プロジェクト」(2017年)の「理論・思想研究」の成果の一部である。

福祉文化論における戦争研究は、戦時の国民の暮らしを特定の文化的活動(絵画、漫画、食文化など)に着目して描出し、戦争が国民の文化的活動を貧しくした側面を強調するものが主流である。当該社会の文化や、文化的活動という視点はもちつつも、戦争の残酷さを記憶・継承するのみならず戦争の残酷さを縮減する努力や環境についても記憶・継承することが課題である。

そこで本稿は第一次世界大戦期に敵国ドイツの俘虜を人道的に扱い、地域住民と共生社会を築いた板東俘虜収容所の経験に着目した。板東俘虜収容所の経験は、戦争と福祉の関係を問うとき、戦争という意味ではなく、戦争の回避という意味でもなく、破壊的なイメージで語られがちな戦時にあって創造的に福祉を実現するという意味において、ある種の戦時の成功体験といえるのではないか。この成功体験は、戦争を進める政府の譲歩としての人権保障という意味を超えて、政府のエージェントである松江豊寿をはじめとする管理者側と、俘虜と、国民としての地元住民が、ともに自発的かつ創造的に戦争の残酷さを縮減したという意味で成功体験なのだ。

その継承によって、戦争の残酷さの回避や縮減という点で、被害の記憶と平和の理念によって主張するのみでなく、そうすることができる関係性を示す史実によって主張する道を意識できるようになる。板東俘虜収容所の経験は、直接に戦争を根絶するというより、戦争を飼い慣らすための基礎とさまざまな技術を追求する現代にとって示唆的といえるだろう。

【キーワード】

戦争 福祉 板東俘虜収容所 松江豊寿

【Abstract】

The paper presents a portion of the results of the Research Project of the Japanese Society for the study of Human Welfare and Culture. Research on war in line with welfare culture studies focuses on specific cultural activities, such as art, comics, and food culture, and emphasizes the aspect that cruel wars have weakened the cultural activities of the people. One of the issues of welfare culture studies is the inheritance, not only of the cruelty of war but also of the utilization of the efforts and environment to reduce the cruelty of war. Therefore, the study focused on the experience of the Bando Prisoner-of-War Camp that humanely treated prisoners during the World War I and built a symbiotic society with local residents. The experience was successful in the sense that it controlled violence in war scenarios, while pursuing welfare and reduced cruelty. The Bando experience is suggested for the present age when the basics and new techniques, are sought to tame wars.

【Key words】

war wellbeing Bando Matsue Toyohisa

1 はじめに

本稿は日本福祉文化学会「研究・調査プロジェクト」(2017年)における「理論・思想研究」枠の成果の一部である。本稿は、第一次世界大戦期に敵国ドイツの俘虜を人道的に扱い、地域住民と友好関係を築いたことで知られる板東俘虜収容所の経験を題材とし、戦時に実現した福祉の条件を理解することを通して、戦争の残酷さを縮減するための視点を示すものである。

社会福祉学における戦争研究は以下に分けられる。一つは社会事業史としての戦時厚生事業に関する研究(例えば、鍾 1998、小倉 2007、高岡 2011)、一つは戦後のいわゆる「逆コース」史観に基づく社会福祉と軍事の関係についての研究(例えば、田代 2004)、一つは福祉思想・福祉哲学としての戦争と社会福祉の関係一般に関する研究である(例えば、関家2017)。これらは理念レベルでは平和的生存権(日本国憲法前文)や生存権(日本国憲法第25条)へと収斂するものであり、軍事と社会福祉をどうにかトレードオフ関係で捉えようとする傾向がある。ただし福祉国家論ないし総力戦体制論においては、戦争と社会福祉が相補的な関係を結ぶ側面も指摘されている(例えば、大河内 1944; 孝橋 1962; 鍾 1998)。いずれにせよ、これらはあくまで社会福祉〔social welfare〕への帰着を想定する研究である。

これに対して福祉文化論における戦争研究は直接的に福祉〔well-being〕に関心をおき、戦時の

国民の暮らしを何らかの文化的活動（絵画、漫画、食文化など）に着目して描出し、残酷な戦争が国民の文化的活動を貧しくした側面を強調するものが主流である¹。

しかしながら福祉文化論には、社会福祉学全般にみられる傾向と同じく、日本の戦後平和主義というべき特定の視点が含まれている。そこには、戦争と福祉を前提として対極化して両立不可能なものとして捉える傾向、戦争の理解において第二次世界大戦期（日本の場合、1931年の満州事変から1945年のポツダム宣言受諾までの15年戦争）を強く意識している傾向、国民が戦争に自ら加担していったことを認めつつも暗黒社会の被害者としての側面を意識している傾向がある。そもそも戦争の残酷さを記述する研究自体が汗牛充棟の状況にあって、これらの研究は、特定の文化的活動に関する資料的価値はあっても、つまるところ戦争が悪であり福祉はこれに抵抗する善であると主張されるに留まっている感が否めない²。

福祉文化論の課題の一つは、当該社会の文化や、文化的活動という視点はもちつつも、戦争の残酷さを記憶・継承するのみならず戦争の残酷さを縮減する努力や環境についても記憶・継承することではないか。社会福祉学ないし福祉文化論は、戦争を議題にするとすると、失敗経験から学ばなければならないという認識に強く規定される。戦争が悪であることは自明であるとして、目指すところが同じであるとしても、そのオルタナティブとして本稿では一つの成功の側面をもつ経験から学ぶという認識を示したい。

そこで本稿では、第一次世界大戦において敵国ドイツの俘虜を人道的に扱い、地域住民と友好関係を築いた板東俘虜収容所の経験を題材とした。板東俘虜収容所の経験は、収容所周辺の住民、政府、国際政治の動向などあらゆるレベルの総合的な作用の結果として実現したものである。板東俘虜収容所の経験は、特殊な条件のもとに成り立ったものであるとしても、戦争と相補の関係をもつ政策としての人権保障の一環に位置づけるに留まって矮小化するべきものではない。福祉に対して創造的であるという点で特筆するべきものである。板東俘虜収容所の経験は、戦争と福祉の関係を問うとき、戦勝という意味ではなく、戦争の回避という意味でもなく、破壊的なイメージで語られがちな戦時にあって創造的に福祉を実現するという意味において、ある種の戦時の成功体験といえるのではないか。この成功体験は、戦争を進める政府の何らかの譲歩としての政策という意味を超えて、政府のエージェントである松江豊寿をはじめとする管理者側と、俘虜と、地元住民としての国民が、ともに自発的かつ創造的に戦争の残酷さを縮減したという意味で成功体験なのだ。

この経験からわれわれは、国民側の社会的文化的な側面として戦争と福祉の対極性を相対化しうる。戦争と福祉は対極ではないからこそ、われわれは戦争の残酷さを縮減することができるという希望を得る。そしてこの継承によって、戦争の残酷さの縮減について、被害の記憶や反戦平和の理念によって主張するだけでなく、そうすることができる可能性を示す史実によって主張する道も意識できるようになる。

2 方法・手順

本稿は俘虜収容所を巡る状況と構造を可視化することや、歴史的事象が継承のなかでいかに発見され構築されてきたかを記述することを強調するものというより、戦時に実現した福祉という視点から、戦争と福祉の関係理解の視点を問うものである。

板東俘虜収容所の俘虜処遇および俘虜と地域住民の交流に関する文献調査、および徳島県鳴門市の鳴門市ドイツ館周辺において資料収集を行った。

板東俘虜収容所を題材にするのは、反戦平和の論調に回収されることなく独自の文脈で記憶・継承されていること、また第一次世界大戦における日本は本格的な総力戦には至らずにあくまで海外（中国の青島）で日本軍が戦う戦争であったため、戦後に生きる我々にとって第二次世界大戦期よりも戦後に日本が関与してきた「戦争」の感覚に近いためでもある。もっとも、第一次世界大戦期における日本の俘虜収容所でスポーツや音楽などの文化的活動が行われたのは板東俘虜収容所に限ったことではない。その中でも板東俘虜収容所は模範収容所といわれ、研究の蓄積があるためこれを選択した。板東俘虜収容所に関する代表的な文献として、林（1993）、富田（2006）、田村（2010）がある。この三点だけでも詳細を知ることが可能である³。本稿ではこの三点を中心に板東俘虜収容所の基本事項を整理しつつ、このほかの文献も参考にした箇所において随時示した。

また、文献以外の資料収集として、板東駅から霊山寺、ドイツ村公園（ドイツ兵の慰霊碑、赤十字ゆかりの地モニュメント）、道の駅「第九の里」、鳴門市ドイツ館、ぼんどうの鐘、大麻比古神社（ドイツ橋、めがね橋）を徒歩で移動し、外観、整備状況のほか、記念碑、看板、チラシのPR情報など、板東俘虜収容所に関して継承されているテキストを確認した。加えて、鳴門市ドイツ館において撮影許可を得て保存した展示資料の掲載情報も本稿に反映させた。

実施期間は2017年11月6日から7日であるが、本稿の公刊が早くとも2020年となったため、2019年9月17日に現地の確認を行い、使用した資料に大きな変化がないことを確認した。

本稿ではまず、第一次世界大戦と板東俘虜収容所に関する基本事項と現在に続く日独交流について概説し、板東俘虜収容所の経験が戦時に実現した福祉というべきものであり、これが戦時のある種の成功体験として継承されてきたことを確認する（3-4）。次に、板東俘虜収容所の経験が実現した諸条件を整理して示す（5）。最後に社会福祉学ないし福祉文化論における戦争研究の視点として板東俘虜収容所の経験の意義を再確認する（6）。

3 第一次世界大戦と板東俘虜収容所

板東俘虜収容所は、戊辰戦争で賊軍とされた会津藩士の血を引く松江豊寿所長のもとで、敵国ドイツの俘虜を人道的に処遇し、地域住民との友好関係を築いたことで知られる。そこでは俘虜のそれぞれの職業を活かした経済活動のほか、スポーツ、音楽、学習会などの文化活動が盛んに行われ、地域住民との交流が盛んであった。特に、板東俘虜収容所は日本で初めてベートーヴェンの第9が演奏された地として有名であり、しばしばメディアで紹介される。

本節では第一次世界大戦と板東俘虜収容所に関する基本事項を整理し、板東俘虜収容所が俘虜に対して可能な限りの福祉を保障した収容所であるとして記憶・継承されていることを示す。

第一次世界大戦と日本の参戦

そもそもなぜ第一次世界大戦において日本はドイツを敵国として戦争するに至ったのか。第一次世界大戦が始まる1914年に至るまで、ヨーロッパでは一部の野心的な政治家や軍人を除いて、世界を巻き込むような大規模戦争は起こるとは考えられていなかった。しかしそれは J. M. ウィンターがいうように「幻想」であった⁴。「幻想」は以下の理由で力をもった。(1) 不安定な政府は戦争を避けるだろう。(2) 経済的なメリットがない戦争は起こらないだろう。(3) 戦争は伝統的な外交戦略で回避できるだろう。(4) どんな戦争もすぐに終わるだろう。

しかし人間は必ずしも合理的な思考によって当該の戦争への賛否を判断するわけではない。(1) について、体制の不安定な国であっても国民は愛国心が強く、軍隊に入っていた。このとき戦争はむしろ体制を強めたとさえいえる。(2) について、合理的な思考ができる経済人はヨーロッパをカバーするネットワークによって戦争が回避されると考えたが、大衆の力はその計算を超えた。(3) についても同様であり、メディアの力と大衆の政治参加はエリートの道理による外交を困難にした。板谷敏彦はこれを「当時の『デモクラシー』のひとつの帰結」と述べている⁵。(4) について、すぐに終わる戦争なら賛成してもいいだろうと考え、国民全員が関わりをもつ総力戦に至るとは想像し難かった。大衆からすれば自分以外の誰かが戦う他人事であった。以上の理由から、第一次世界大戦の勃発は誤算だったが、戦争が起こらないいくつかの合理的な理由があてにならないことは明らかになった。

日本の参戦の理由は、板東俘虜収容所関係の研究においては、日英同盟の枠組みを利用して青島という地政学的利益を獲得するために「進出」したというのが通説である⁶。ドイツと絶対に戦争をしなければならない理由もないが、絶対にしてはならない理由もない。青島戦は、ドイツと戦争をする必然性があるようでなく、そこにドイツがいたから、というものであった。

施設

第一次世界大戦において日本は1914年8月23日にドイツに宣戦布告し、9月から11月にかけて中国の山東半島のドイツ租借地にある青島要塞を攻撃した。ドイツ軍の降伏後、宣誓解放者や重症者を除く約4,700名が日本各地の12ヶ所の収容所に送られた⁷。板東俘虜収容所はこのうち松山、徳島、丸亀の3収容所を統合したものであり、板東町の陸軍演習場に兵舎（バラック）を建てて開設した。ここに計953名の俘虜が送られ、入所者は最大時には1,000名を超えた⁸。所長は松江豊寿である。1920年に全員解放となり（63名が希望してそのまま日本に留まった）、板東に移ってからは3年程度収容所生活を送ったことになる。板東俘虜収容所は「収容所」という名称であるが、一個の建造物の中を指すのではなく実質的には町であり、来訪する宣教師や面会者のほか、地域住民とも交流をもっていた。

食堂、医務室、洗濯場、シャワー室、浴室などのほか、温水浴場、理髪店、写真屋、酒保、製パン所、玉突き場、石版印刷所、郵便局、図書館、読書室、コーヒーハウス、飲食店、家具や靴の修理屋、たばこ屋、演劇や音楽会や講演会を行う講堂、教会、別荘がある。また大鮑島（タパオタオ）という俘虜による商店街があった。

また所外でもさまざまな設備が造られた。所内に小規模の運動場が設けられていたが、俘虜たちは所内トゥルネン場や九柱戯場、レスリングやボクシングの練習場などを造り、松江所長を介して地元の人々から土地を借りて所外にもサッカー場やテニスコートなどを造った。

一日の生活

収容所では、午前6時に起床し、6時半に点呼、7時に朝食、7時半から運動、11時半に昼食、14時から運動、17時半に夕食、22時に寝るという生活であった⁹。空き時間があれば読書など文化的活動のほか、トランプ、ビリヤード、チェスなどの娯楽も行った¹⁰。

食卓にはトンカツ、パン、ビール、チーズ、スープなどのドイツ風メニューが並んだほか、収容所のなかには水晶宮という高級飲食店もあった。サニタスという温泉施設があり、スチームバスやシャワーを利用できたほか、温泉療法の専門家がマッサージや泥のパックも行った。

印刷・出版・郵便

板東俘虜収容所では積極的な印刷、出版、郵便活動が認められた。ここではその代表的なものを取りあげる。

1917年9月から1919年9月まで、俘虜は『デイ・バラック』〔Die Baracke: Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan〕という新聞を収容所内の印刷所で印刷・発行していた。その内容は収容所内の生活、地元板東や徳島のこと、演劇、音楽、スポーツ、格言や詩、チェス、挿絵といったものから、懸賞論文、戦況、世界情勢まで、非常に多岐に渡っている。週間から月刊に

切り替えた1919年4月からは商業広告（化粧品類、ビール、ボーリング、ビリヤード、写真、人形劇、花屋、書店、楽器など）が掲載されており、生活文化を彩る商品に関する精力的な営業活動がうかがえる¹¹。

このほか、日本の新聞から最新の報道を提供する新聞『日刊電報サービス』や、板東俘虜収容所の前身である松山俘虜収容所の新聞『陣営の火』も刊行した¹²。単行本やポスター、プログラムも出版しており、単行本には『相撲図説 日本の格闘技』『日本地理』『日本語日常教科書』など日本関係の図書もあった¹³。また久留米から移送されてきた俘虜たちに向けて『板東俘虜収容所案内書』を、帰国の船上では『帰国航』〔Die Heimfahrt〕を発行した。

郵便物の発信数は1年間に手紙16,137通、ハガキ57,770枚であり、規定数を大きく超えていたが、これは高木副官の機転で、クリスマスや誕生祝のカードや苦情ハガキなどを含め、特別用の郵便物として認めたためである¹⁴。

スポーツ・運動

板東俘虜収容所ではスポーツが盛んに行われており、これは日本のスポーツ史という観点からも特筆すべきことである。板東俘虜収容所で行われていたスポーツはサッカー、テニス、シュラークバル、ファウストバル、トライバル、コルプバル、ホッケー、ハンドボール、登山、レスリング、ボクシング、重量挙げ、トゥルネン、競歩、散歩、遠足、水泳、九柱戯、ビリヤード、水中スポーツ、バードウォッチングなど多彩であり、当時の日本人にとって新しいものが多く紹介された¹⁵。

松江所長らは地元の人々と交渉して収容所の前に「菜園地及び運動場」として土地を借り受け、施設づくりを俘虜たちに委ねた¹⁶。俘虜たちは早速スポーツ委員会を組織し、傘下に各種の会員制スポーツクラブを組織した。所外に行くときも煩雑な手続きはなく、木製の鑑札を衛兵に見せて鉄条網の外に出られた。所外のスポーツ場の近くで農作物を作ったり鶏を飼ったりする人もおり、肥料運びによってスポーツマンの鬨感をかっただが、収穫をともに楽しむなどの交流も芽生えた¹⁷。ただし、鶏は頻繁に盗まれ、トラブルとなっていたようである¹⁸。

俘虜たちにとってスポーツを満足に行うことは生活上の非常に重要なニーズであった。彼らは板東に来る以前より、定期的に運動を行うことなしに俘虜生活を送ることのつらさや、生活における運動の重要性を実感していたためである。地元住民は当時では珍しかったさまざまなスポーツを俘虜が行う様子を鉄条網越しに見物していた。近隣の学校の教師や生徒が俘虜実技を見学したほか、俘虜は出張で指導も行い、交流をもった¹⁹。

遠足も盛んに行われた。これらは行き先・計画・指揮を俘虜の将校に一任し、日本兵の引率なしでの行動も認められた²⁰。夏季の遠足は水浴も兼ねていた。川のみでなく榑木海岸に遠足に行った際に水泳を行ったことも「足を洗う」ということにして黙認された。はじめは眺めるだけであった榑木海岸の漁民も、やがてドイツ人に慣れると果物、魚、卵、菓子、わら草履などをドイツ人に売

るなどして交流もち、水泳大会が開催されたときにはソーセージの屋台が出て野外演奏も行われた²¹。

音楽・演劇・芸術

板東俘虜収容所は日本で初めてベートーベンの「第九」が演奏された地として有名である。これは1918年6月1日に徳島オーケストラ第2回シンフォニーコンサートにおいて「第九」が演奏されたことを指す²²。

俘虜のパウル・エンゲルは当時の日本では珍しいバイオリン、ビオラ、マンドリン、チェロ奏者と、日本の楽器の琴、三味線奏者などを集めて西洋音楽を演奏した。これを聴いて音楽活動に興味をもった徳島市の住民が、自分たちも演奏したくなったため俘虜から指導を受けたいと松江所長に願い出た。この許可を得てエンゲルは収容所外に出向いてエンゲル音楽教室を開き、西洋音楽を指導した。エンゲルは霊山寺前の遍路宿で指導を始め、やがて立木写真館（NHK連続テレビ小説「なっちゃんの写真館」で有名である）を練習の場とするようになった。これを源流として、生徒らが徳島エンゲル楽団を結成し、今日も徳島県のさまざまな合唱団や交響楽団の活動に引き継がれた。エンゲルの貢献は「徳島の市民音楽活動の基礎を築いてくれた」と評されるほどである²³。なお徳島エンゲル楽団の仁木朋七は、俘虜の残した楽器をもとに、徳島で初めての洋楽器店「仁木文化堂」を開いた²⁴。

徳島衛生協会は収容所の楽団を招待して徳島市内で二度「和洋大音楽大会」を開催した。第1回は1918年であり、第1部が箏曲、第2部が洋楽、第3部が長唄という構成であった。第2回は1919年であり、午前・午後の2部構成で、洋楽と長唄のほか、日本舞踊もあった。

このほか、愛国的な記念日には軍隊音楽が演奏したり、誕生日を迎えた俘虜の窓辺で早朝に集団で演奏を贈ったりした。

演劇活動も盛んであり、野外での上演もあった。ゲーテやシラーなどの古典から、シェイクスピアやシャーロックホームズなど幅広くあり、娯楽性の高いバラエティショーもあった²⁵。最も苦勞したのは女性役と衣装であった。女性役は人気であり調整が大変だった上、衣装は協力して費用を工面し、何度も縫い直すなどした²⁶。幕間にはエンゲル指揮の演奏もあった。

人形劇は手掘りの操り人形を用いたものであり、非常に人気があった。特にクリスマスは俘虜にとって特に重要なイベントであり、イブの夜のパーティはもちろんコンサートや演劇が続いて盛り上がった。そのほか、写真展、映画会、絵画展も行われた²⁷。

経済活動

収容所内には「タパタオ」と呼ばれる俘虜による商工街区があった。そこには大工、ペンキ屋、運送屋、写真屋、時計職人、鍵職人、鍛冶屋、製本屋、楽器修理屋、金属加工、ガラス工、アイス

クリーム屋、家具屋など多くの専門店と職人がいた。製菓店「ゲーバ」では、所外の日本人である藤田只之助が俘虜に製パンと菓子作りの手ほどきを受け、1919年に徳島市内に「獨逸軒」を開き、ドイツ風の味覚を市民に広めた²⁸。

菜園活動は所内に留まらず、所外の農地を借り上げてサラダ菜、トマトなどの西洋野菜や花を俘虜たちに供給し続けた。俘虜の指導の下で20種以上の西洋野菜を作り収容所に供給した。付近の農学校や農家の見学希望者が来たほか、俘虜は板西町（現・板野町）の農蚕学校で西洋野菜についての講演も行っている²⁹。また収容所では豚、鶏、アヒルなどの家畜や蜜蜂も飼育した。俘虜が鶏舎を建設しドイツ式の養鶏が始まると、これも近隣住民の見学希望者があった。俘虜のなかには所外の日本人に牧畜指導を行ったり乳製品や豚肉の加工技術を提供したりした者もいた。特に富田製菓畜産部の「ドイツ牧舎」の建設は重要な貢献であった³⁰。この牧舎は技術者の俘虜が設計し、俘虜たちと地元の大工で5ヶ月かけて完成したものである。そこで俘虜たちは科学的な飼育管理や乳製品加工、豚肉加工の技術指導にあたった。

なお、このほか、さまざまな職能をもつ俘虜による地域での技術指導としては、ウイスキーやブランデーの製造、燻製肉の製造、去勢、標本作成、鳥類剥製、植物採集、染色、石鹼製造、製図、設計・建築、西洋漬物、煙草の植付、ケチャップの加工、気象観測など非常に広範に行われ、俘虜と地域住民の交流が深まった³¹。逆に俘虜の側も養蚕、稲作、藍作りの見学を希望する者が多かった³²。

その他の活動・交流

収容所では日本語や中国語をはじめとする語学や書道などの学習会が行われた。また講演会は約2年半で200回以上、さまざまな主題で開かれた。専門知識をもつ俘虜が地学、生物学、ドイツ文学、哲学、中国事情、戦局などさまざまなテーマで行った³³。

板東俘虜収容所での図書室蔵書は、俘虜が本国から取り寄せた図書や、東アジアのドイツ人クラブや日本の青年教会から寄贈された図書を所蔵しており、5,400冊以上あった³⁴。収容所生活において読書は貴重な娯楽であった。

また俘虜たちは陶芸も行った。俘虜たちのなかには陶器の学習や製作に収容所から5kmほど離れた大谷焼の窯元に出かける者もあり、鉢、火鉢、花瓶、壺のほかビールジョッキも製作した。また植物の採取と標本作製の分野に長けた俘虜はこれを近隣の板東小学校に寄贈したり、採取と標本を指導したりした。

また俘虜の健康で文化的な生活を支える上で保険という連帯の技術も重要であった。1916年頃に丸亀俘虜収容所で健康保険組合を作った成果を継承して板東俘虜収容所でも組織されたのであった。「資力のない病者への配慮、困窮時の同志的協力、全体の福祉」を理念として俘虜同士の連帯による医療保障が行われた³⁵。軽い病気の場合は収容所内の病院で治療を受けたが、重い病気の場合

合には徳島市内の病院の医師による治療を受けることになり、相応の治療費が必要となったため、保険制度が役立った。日本の健康保険法の施行が1927年であるが、この10年前には健康保険組合が作られていたことになり、これは医療史的に特筆すべきものと評される³⁶。組合の資源は全員の自発的な応能負担の会費のほか、余裕のある俘虜からのカンパ、所内のスポーツ協会の収益金、天津婦人クラブからの寄付金、ドイツ本国からの義援金、東京の救援委員会などであった。組合は二つの薬局を経営しており、患者に薬品や栄養剤などが提供された³⁷。またドイツ人医師のフォン・シャープ博士によって組織された上海の救援委員会からは薬事上の助言が与えられた³⁸。徳島市の婦人会は所内の病院に来診にくる医師の費用を負担した。結果として、1,000名を超える収容者のうち、当時流行したスペイン風邪（インフルエンザ）による死者は3名か4名ほどに抑えられた³⁹。

1918年3月には四国八十八ヶ所の一番札所の霊山寺とその門前の板東町公会堂を会場にして俘虜の作品展覧会が開かれた。絵画、楽器、標本、模型、彫金、木彫り、玩具などの手工製品のほか⁴⁰、生活用品（特にコーヒーメーカーや水生飼育器、雨量計などが感嘆を受けた）、家具、洋菓子やハムなどの食品が出品されたばかりでなく、音楽の演奏、手品、体操の実演などが行われ、輪投げや射的などの娯楽の場や喫茶店も設けられた。展示品の多くは即売され追加注文もあった。また鳥類学や植物学などの講義が日本語とドイツ語で行われ、多くの日本人が耳を傾けた。教師に引率されて多くの子どもが来場した。とりわけ、東久邇宮殿下の来場は俘虜の活動に皇室が理解を示し公の承認を与えたものとして注目された。

帰国直前の1919年10月には徳島市の劇場「新富座」で徳島衛生協会主催の送別演芸会が4日間開催された。音楽、劇、ダンス、体操、格闘技が演じられ、有料であったが会場は連日超満員の盛況であった。特に、向かい合った二人が同じ動作をする「鏡」と称したパントマイムは爆笑を誘った⁴¹。

俘虜たちは地域との交流のなかで、収容所と板東の町を繋ぎ、また洪水に対策するため、母国の土木技術を活かしていくつもの橋を造った。不毛の地に橋を架け、周辺を公園とした俘虜たちに住民は感謝と尊敬の念を抱いた。最後の橋の完成は1918年6月であり、老齢の神官がお祓いをし、祝詞をあげた。現存し観光地となっているのが大麻比古神社のドイツ橋とめがね橋である。

俘虜はさまざまな活動を通して自らの文化的な生活環境を調べ、その延長として、地域住民に対する音楽やスポーツ、経済活動上の知識や技術の伝達・教育を通じた多くの文化交流も果たした。無論、俘虜たちもまた貪欲に日本文化を摂取したのであり、相互の文化理解が図られた。このほか、俘虜のマイスナーは近隣の警察官や庭師らの話を聞きつつ、狸の民間伝承や文化的表象に関して、阿波狸合戦の概説や狐と狸の比較などを含め、考察を行っている⁴²。この考察は徳島の民話に留まらず、日本文化の考察として非常に鋭いものである。

鳴門市ドイツ館展示資料によると、俘虜らは板東の人々を注意深く観察し、「はじめは板東の人々は笑わない人々だと思っていた」「日本のレスリング（相撲）が子どもたちの間でも盛んだがなぜかレフリー（行司役）が一番騒がしい」「意外に破れない紙と竹の傘」「（お辞儀するのを見て）日

本人はなぜ地面を見るのかと思った」「田植えは腰が痛い」「家族の中ではおじいさんが一番偉い」といった、さまざまな感想を残している。また日本人の賛嘆や慇懃な振る舞いが本心とは無関係であると洞察していた。一方で日本人はドイツ人に対して、規則正しく、経済合理性があり、運動を怠らず、志学的であるとして、要するにおそろしく真面目であるという印象をもっていた。ただ、ジョギングをするドイツ人に対して、そのような習慣のない日本人からみて、何の必要があるのかと呆れていたり、また生活上の極端な個人主義に呆れていたりした。

4 その後の日独交流と日本での継承

第二次世界大戦期に板東俘虜収容所は軍事演習用の兵舎となった。1937年、日独伊三国防共協定の締結に際して地元の青年団が「ドイツ兵の慰霊碑」を清掃したものの、戦争の混乱の中で慰霊碑は草に埋もれてしまった⁴³。

戦後には外地で家を失った人々の引き上げ者住宅「新生寮」（「新生荘」ともいう）となった。兵舎の一部は民間に払い下げられ、移築して使用されていることが2002年に発見された。現在近辺で7か所発見され、うち一ヶ所が移築され道の駅「第九の里」の骨組みに使用されている。新生寮に高橋夫妻（高橋敏治・高橋春枝）が住むことになり、この夫妻が裏山でドイツ兵の墓を発見し、13年に渡り供養を続けた⁴⁴。1960年10月に読売新聞や徳島新聞でこの活動が紹介され、11月には西ドイツ大使のハース夫妻と神戸総領事ベルガー夫妻が現地に来訪した⁴⁵。大使は高橋夫妻が墓守を続けてきたことに対して感謝状と鳩時計を贈った⁴⁶。1961年7月にハース大使が帰国し、墓守のことを西ドイツ内の新聞に報告し、新聞に掲載された⁴⁷。1962年1月にジョン・クナークら元俘虜の人々から高橋夫妻に、元俘虜のエドアルト・ライポルトから高橋春枝氏や大麻町長に手紙が届いた。ドイツでは元俘虜の生き残りが1934年から毎年フランクフルトに集って会合する「バンドーを偲ぶ会」なる記念活動が続けていたのだった（東西ドイツ分断後も両側の元俘虜は連絡を保った）⁴⁸。

ライポルト氏の手紙を機に、日本でも忘れられかけていた日独親善の機運が高まっていった。1962年3月には徳島県知事の渡欧に際して大麻町は「独逸人を偲ぶ協議会」を結成し、収容所跡地などを映して作成した8ミリ映画をアルバム2冊とともに知事に託し、5月に知事がライポルトと面会してこれらを届けた⁴⁹。7月には板東の古老たちが帰国した知事を囲み、「ドイツを語る会」を開いた⁵⁰。ライポルトに届けられた8ミリ映画は「バンドーを偲ぶ会」でも上映され、慰霊碑が保護されていることが感動を呼び、1963年1月には会員33名より墓の管理費用として小切手が送られた⁵¹。同年、大麻町議会は「ドイツ勇士慰霊祭」を毎年行うことを議決し、慰霊碑の前で慰霊祭を行った⁵²。1964年7月には神戸総領事ベークナー夫妻が大麻町に来訪し、高橋春枝氏に西ドイツのリュプケ大統領からの功労勲章と感謝状が授与された。1968年には元俘虜で鎌倉に住んでいたヨハンネス・バートが千代婦人を伴って板東に来訪し、1970年には大阪万博を機にライポルトが同じく元俘虜のパウル・クライとともに来訪した⁵³。

交流の復活を機に記念館建設の機運が高まり、元俘虜からの資料提供や寄付もあって、1972年に鳴門市にドイツ館が完成した⁵⁴。敵国の、ある一時期を過ごした俘虜を記念したり資料を保管したりする記念館は特異であろう。ドイツ館が完成するとさらに元俘虜やその家族たちから寄付金や資料が贈られたり、地域の人々などから元俘虜たちが作り使用した家具などの生活用具が寄贈されたりした。収容所に勤務していた者や元俘虜など当事者のほか、元俘虜の家族が近親者の思い出を求めて来館するなど、ドイツ館が交流や継承の場としての機能をもっている。

1973年には鳴門市が西ドイツのリューネブルク市と姉妹都市提携を結んだ。両市は塩業を基盤として発展してきたことがもとになっているが、板東俘虜収容所をめぐる交流も重要な礎となっている⁵⁵。リューネブルク市とは一年交代で使節団を派遣し合い、互いに日独協会・独日協会を設立し、また両市の高校も姉妹校として提携している。1974年、ドイツの「バンドーを偲ぶ会」の活動およびリューネブルク市との姉妹都市締結を機に、日本でも俘虜と交流のあった人々を会員とする「ドイツ兵を偲ぶ会」が作られた⁵⁶。

1976年には日本全国の収容所で死亡した者の合同慰霊碑がドイツ兵の墓の横に建設された。また日独親善のシンボルおよび市民のレクリエーションの場として、板東俘虜収容所跡地を中心にドイツ村公園の造成が進められ、1978年に広場に日独両国語で「友愛」と書かれた石碑が建てられた。ここでは市民によってドイツ祭としてドイツ風ビアガーデンやカラオケなどが催されている。1981年には鳴門市文化会館のこけら落としのため、「鳴門市第九をうたう会」が発足、市民総ぐるみで第九の記念演奏会が開かれた⁵⁷。以後、鳴門市では毎年6月の第1日曜日に演奏会を開き、全国から愛好家が参加している。1983年には板東俘虜収容所の近隣に「ばんどうの鐘」が建設され、朝夕6時と正午の3回鳴らされている。姉妹都市のリューネブルクにも1988年、鳴門公園が造成され、旧大麻町役場から贈られた桜の木も植えられた。

1994年、鳴門市市制50周年を記念してドイツ館資料研究会が新聞『デイ・バラック』の日本語への翻訳作業と書籍化を進め、1998年に「第1巻」、2001年に「第2巻」、2005年に「第3巻」、2007年に最終部分の「第4巻」が発刊され、10年以上に渡る作業が完了した⁵⁸。同じく市政50周年を記念して1997年にはドイツ人彫刻家のペーター・クレッシェルによるベートーヴェン像がドイツ館の前に建てられた。

2006年には板東俘虜収容所と松江豊寿を題材にした映画『バルトの楽園』（東映、出目昌伸監督）が公開された。この2006年前後から板東俘虜収容所関係の文化財登録が活性化している。2004年には俘虜の手による石造の「ドイツ橋」が県指定の文化財（史跡）に、「安藝家バラック（旧板東俘虜収容所）」、「柿本家バラック（旧板東俘虜収容所）」、「船本家牧舎（旧富田畜産部牧舎）」が国の文化財（登録有形文化財・建造物）となった。2008年には『デイ・バラック』や『帰国航』などの印刷物のほとんどが県指定の文化財（歴史資料）に指定された。2019年10月にはこれに鳴門市ドイツ館の所蔵資料304点、徳島県立文書館の所蔵資料10点の計314点が追加指定された⁵⁹。2018年6月

1日から3日間、第9の日本初演から100年の節目として鳴門市では100周年記念事業としてさまざまなイベントが催され、元俘虜の子孫もドイツや周辺諸国から来訪し市民らと親睦を深めた⁶⁰。同年10月15日には「板東俘虜収容所跡」が国の文化財（史跡名勝天然記念物・史跡）として指定された。

なお松江所長は退役後に会津に戻り、若松市長に就任し数々の功績を残したが⁶¹、松江の築いた縁で会津若松市と鳴門市は親善交流を締結し、さまざまな分野で交流している。福島県会津若松市では鳴門市の100周年事業と同じく、2018年9月22日に松江豊寿の顕彰碑の除幕式が行われた⁶²。会津藩が戊辰戦争で新政府軍に降伏した150年前と同じ22日であった。

2018年12月には徳島新聞社から『第九永遠なり－鳴門初演100年』が出版され、元俘虜の子孫へのインタビューを含め、板東俘虜収容所を巡る日独交流が継承されている。

5 戦時に実現した福祉の条件

以上より、板東俘虜収容所の経験は、第一次世界大戦という戦時に実現した福祉というべき経験であったといえる。それは戦時のある種の成功体験、すなわち、戦勝ではなく戦時に戦争の残酷さを縮減し、それどころか福祉的といえるような生活が実現したという意味での成功として継承されている。板東俘虜収容所において、敵国の俘虜におけるさまざまな文化的活動と地域住民との交流はなぜ実現したのか。その要因として、代表的なものを大きく分けると、指導者の徳、政府の国際法と国際政治への関心、地域社会の敵国への関心、地域社会の寛容な風土、経済効果の5点があげられる。

指導者の徳

最も代表的な言説として、松江所長の徳があげられる⁶³。板東俘虜収容所を含め当時の俘虜収容所の活動は1864年のジュネーヴ条約、1899年のハーグ陸戦条約、国内法に基づく俘虜取締規則あるいは陸軍省・海軍省の省令による規則ならびに細則によって規範化されていた。しかし所長の裁量権によって実際には収容所での生活に相当な差が生じた。板東俘虜収容所での生活は俘虜を人道的に扱ったとして模範収容所といわれるが、これに対して久留米の収容所は日本のKZ（ナチスの強制収容所）ともいわれる劣悪な収容所としてしばしば引き合いに出される⁶⁴。これは俘虜虐待で悪名高い真崎甚三郎を施設長とする施設である。

ただ松江の徳は不可欠であったとしても、その表現は定まらず、換言性・翻訳性がある。松江の徳は賊軍の会津人としての敗者・弱者の痛みを知るところからくる武士道精神の一つである「武士の情け」として語られる場合が多い。これは、諸外国への説明として解説を目指した新渡戸稲造の『武士道』のような、何らかの体系をもつものだろうか。松江の徳に関しては、会津藩で善政を行った保科正之の「仁慈の心」という、儒学的響きの強い徳の継承として説明されることもある⁶⁵。なお松江が敗者・弱者の痛みを知り労わることについては、会津のみならず、韓国駐劄群司令官長谷

川好道の第二副官に登用された際に強引な韓国併合に嫌気がさし、虐げられる韓国人の姿に会津人の姿を見たのではないかという推察もある⁶⁶。

また板東俘虜収容所の施設運営がジュネーブ条約（赤十字条約）の精神を踏まえたものであったとして、松江に赤十字の「博愛」や「人道」の精神を見出すこともある。この点、軍首脳は捕虜を人間的に扱う管理者のもとで収容所を完成させたい意向から松江を選任したという側面があり、この場合の軍首脳の視点からみれば松江の徳はまさに国際法で保障された、あるいは国際法に抵触しないという程度の意味で法的な「人道」の意味はもったといえる。

これらの議論を相互参照して徳の要素や文脈を統合させることは困難であるし、またその必要もない。というより、松江の継承は、温情や徳というものの柔軟な換言性・翻訳性を示している。松江の徳がどのような原理に導かれていても、人間を人間らしく扱うという端的な表現で語られる精神が、換言性・翻訳性が高くそれゆえに共有可能性が高いからこそ、誰もが松江のそれを認めることができるのである。

政府（軍部）の国際法と国際政治への関心

先述の通り、軍首脳は捕虜を人間的に扱うという点で、板東俘虜収容所の所長に松江を選任した側面がある。当時日本は欧米列強の進出に遅れまいとし、一等国の仲間入りのために国際法を遵守する必要があった。俘虜の扱いは、悪名高い久留米などを除けば、他の収容所においても人道的な処遇が目指された⁶⁷。その理由としては大戦前の日本とドイツの関係が良好であったこと、また日本の最大の国際的課題が国際的評価の獲得による不平等条約の解消であったことだ⁶⁸。

もっとも、軍が西洋的な国際法の理念をどこまで理解していたかは怪しく、単に死にきれなかった卑怯者に情けをかけて手厚くもてなすという程度の意味で解していたかもしれない⁶⁹。実際、軍部は松江による俘虜処遇に対して過度な厚遇であるとして圧力をかけることもあった。

また遵法といっても、法の機能には文化的制約があり、松江による俘虜の処遇も、人権などの権利の言語や民主制の理念に基づく統治として俘虜に正当な権利が分配されたのではなく、温情と徳目によるものである。ただ、法とは、本音では遵守したくない軍部のような者に遵守させることに意義がある。法の論理のように高度に理性的に探究され共有された建前こそが、理性的に構築された近代国家の本質として秩序を形成する。個人が主体となる近代国家における社会も、個々の国家が主体となる国際社会も、個の本音ではなく個同士の関係を構成する建前こそが、本質的に重要である。松江が俘虜に対して「刑務所ではなく収容所である」「俘虜は罪人ではなく俘虜である」というのは、温情をかける論拠というよりは方便だったかもしれない。しかしこの方便こそが近代国家として本質的な語彙である。

したがって板東俘虜収容所での俘虜の処遇において、軍が国際法と国際的評価を意識していたことには極めて重要な意味があったと考えられる。

地域社会の敵国への関心

そもそも、日本はドイツと青島で戦争となったが、ほとんどの日本人はドイツ人に対して特に悪感情はなく、日英同盟と青島の地政学的重要性といった関心から参戦したにすぎないという事情がある。日本は本土でドイツと戦ったわけではなく、四国でも犠牲者は少なかったため、ドイツ人俘虜を恨む必然性が乏しかった。これに対しドイツ人の側も、日本が参戦したのはイギリスが日本を傭兵のように雇ったにすぎないと考えていた。

青島戦の以前には日本とドイツは友好関係にあった⁷⁰。ドイツは当時世界で最も進んだ文明国の一つであり、ドイツ人のもつ技術や文化を吸収する好機であった。政府もドイツ人俘虜の指導を受けたいときは所轄の商工会議所を通して俘虜情報局へ申し出るよう布告を出しているほか、新聞等でもロシア人俘虜に比較してドイツ人俘虜がいかに優秀であるかを強調していた⁷¹。そのため戦勝国民と俘虜という関係より、片田舎と文明国の珍客という関係で、あらゆる分野で西洋文化を摂取するに至ったものと推察される⁷²。もっとも、技術指導は板東に限らず各地の収容所で行われたはずだが、「それぞれの収容所長やスタッフの具体的な方針や姿勢の相違によって、その成果に大きな差が生じたことは否定できない」だろう⁷³。

例えば、日本のKZ（ナチスの強制収容所）ともいわれる劣悪な収容所としてしばしば引き合いに出される久留米では事情が異なる。久留米の兵士は青島でもっとも戦死者を出し、地域住民におけるドイツに対する被害者意識が強かったこともあって、俘虜に罵声を浴びせ石を投げるなど、敵意を示す住民も多かった。久留米俘虜収容所での劣悪な環境については、悪名高い真崎甚三郎など歴代施設長の運営のみならず、地元住民の感情も関係している可能性が高い。

地域社会の寛容な文化

敵国の俘虜に対して福祉が実現されたことは、救済的な「与える」「保障される」という発想で説明できるものではない。馴染みのない文化の、まして敵国の俘虜という他者に対して地元住民は歓迎的であった。俘虜がはじめて徳島の池ノ谷駅に降りたとき、恥じ入ることなく明るく電車を降りて来る様子に対して、地元住民は驚きつつも歓迎した。もっとも、俘虜に対して歓迎的だったのは板東だけではなく、日本だけでもない。例えば青島でも俘虜に対して歓迎的であった。あくまでその前提の上であるが、板東の寛容的風土は特筆に値する。

すなわち、板東には四国霊場八十八ヶ所の一番札場である靈山寺があり、寺の門前には遍路道具屋、遍路宿が軒を連ねており、「親切心や思いやり、純農村的な純朴さ」があったこと、ドイツ人にとっても「東洋的な神社仏閣の存在は、つれづれを慰めてくれる安らぎの場となった」ことが⁷⁴、相互に心を開かせることに繋がった可能性はある。古くから「お接待」や「善根宿」を通じて不遇の遍路や落魄の漂泊者への歓待が生き続けている土地柄であった。

経済効果

俘虜収容所の誘致については多大な経済効果が期待されていた。捕虜は一大消費団体であり、俘虜は軍のほか、元の勤務先からの給料、家族からの送金、救援団体からの義援金も得ているので、これが地元経済を潤すことになる。捕虜1年分の食費が町の数年分の歳入に匹敵したという説もあり、日本各地で収容所の誘致運動が行われていた⁷⁵。このことも地域住民が板東俘虜収容所を受け入れて俘虜と交流する上での期待や理解に繋がったと考えられる。

その他

有力な要因とはいえないであろうが、松江の寛容な施策が可能となった条件として地理的状況がある。板東の町は貿易港のない四国の農村地帯にあったため、脱走への警戒態勢をとろうという意識が低かったこともあげられる。

また、俘虜の側に血気盛んな現役兵が少なく、人生経験の多い応召兵が多かったこと、日本語が話せる者がいたことも所内の自由な雰囲気を実現させる要因となった可能性もある⁷⁶。

6 戦争の残酷さの縮減

板東俘虜収容所の経験は、ドイツ人との戦争を許容する人々と、ドイツ人と共生社会を営む人々が同じ時代、社会、土地にあったことを示している。板東俘虜収容所に関する研究では、友愛の象徴としての音楽（特にベートーヴェンの第9）が強調される。しかし実際の戦場とはダグラス・ラミスがいうように「音楽がなかった」場所のはずである⁷⁷。われわれは戦場にいない以上、戦場にいないからこそ無責任に、殺し合える人々と共生できるのと同様に、共生できる人々と殺し合えるということだろうか。

ところが、より困惑すべきことに、このことは戦場においてもそうであった。俘虜たちの墓守をしていた高橋夫妻の跡を継いだ高橋敏夫によると、父の敏治は、日中戦争において谷川を挟んで日本軍と中国軍が大砲を撃ち合っていた際に中国軍との「友愛」を感じたという。日本軍も中国軍も同じ谷の水を汲みに行くので、そのときは撃ち合いをやめる。日本軍側の山では岩塩が取れるが中国軍側からは取れない。そこで谷川の岩の上に塩の入った袋を置いておくと、数日後に消えてなくなり、代わりに白菜の束が三つ四つ置いてあった。岩塩と野菜の交換はそれから続いたという。敏治は「国と国は戦争をしても人と人は戦争をしていないんだなあ……（中略）……向こうの陣地にいる中国兵たちも家に帰れば妻も子もいるその中国兵相手の戦争っていったい何だろう。つくづくいやになりました」という思いを抱いたという⁷⁸。戦場にしようといまいと、友愛の音楽は流れるし血も流れるというのが現実だとすれば、繰り返しになるが、われわれは殺し合える人々と共生できる一方で、共生できる人々と殺し合える。第一次世界大戦の勃発と青島戦に至った経緯もそうであるが、戦争をしないという点に関して人間は信用ならないのである。

板東の住民はドイツ人との友愛関係を築き、福祉を実現させた。音楽、スポーツ、学術など実体的な活動という意味での文化は豊かになったといえるが、しかし戦争そのものに対する精神や習慣としての文化の何が変わったのか。少なくともいかなる戦争をも回避しようという精神や習慣が構成されたわけではない。板東俘虜収容所の継承は、近い将来に友として分かり合えるかもしれない相手との戦争について正面から問う姿勢は弱い。というより、戦争そのものについて問う姿勢が弱い。板東は戦場ではなかったし、死者も多くなかった。

文学的な表現になるが、鳴門市ドイツ館内の資料およびドイツ館周辺の記念碑や慰霊碑の情報から感じられたのは、板東には戦争のにおいが薄い、というより、戦後平和主義のにおいが薄いということである。映画作品の『バルトの楽園』においては、映画オリジナルのフィクションの部分として、日本人女性を愛したために上官の命令に背いて日本軍を攻撃しなかったドイツ兵とその子の物語が作品の重要な位置におかれている。しかしそれをもってしても、作品全体に貫かれている人道と友愛は、戦争に抵抗するものというよりむしろ一個のドラマの必要不可欠な要素として戦争と調和している。

戦争の残酷さをことさらに強調しない継承は、戦後平和主義の視点から戦争の残酷さを描こうとする従来の福祉文化論の論調からすれば、物足りないものがあるだろう。もっとも、近年では戦後平和主義の視点から二度と戦争をしないと誓いをたてる継承もみられなくはない。2018年12月に徳島新聞社から出版された『第九永遠なり－鳴門初演100年』では、元俘虜の子孫へのインタビュー等から友愛のみならず戦争の不在としての「平和」への誓いが強調されている。ドイツ館前のベートヴェン像を制作したドイツ人彫刻家のペーター・クレッシュェルは徳島市の西部公園にも「悲しみを超えて」と題した記念碑の彫像を寄贈している。これは戦争で息子を亡くした夫婦が肩を寄せ合う姿を表現したものであり、二度と戦争を繰り返さない社会を願って造ったものである⁷⁹。

しかし板東俘虜収容所の経験とその継承の特異性は、戦後平和主義の視点から単に戦争が残酷な悪であり平和が善であるという自明性の上塗りに回収されるべきものではない。板東俘虜収容所の経験がたとえ特殊な状況下で成り立ったものであるとしても、その特殊性を継承してきたことが重要なのだ。一般化された戦争の悪と平和の善を強調しても、戦争をしないという点に関して人間は信用ならない。しかし戦争の残酷さを縮減しようと努力する点に関しては信用できる。板東俘虜収容所の経験の継承は、松江の徳の賛美のほかには、一般化された反戦平和でもなく、また英霊の顕彰でもなく、また犠牲者の慰霊でもなく、ただ敵が友になったという事実から、いつかまた友が敵になりうるという予感に対してそれでもまた友になりうるという希望を見出すことにあるのではないか。

映画作品の『バルトの楽園』で強調されるように「軍人は人間になった」のである。この経験は残酷な戦争そのものを友愛、人権、共生といった理念で否定し克服したことを意味しているのではなく、敵国の俘虜に対して協同で福祉を実現させることを通して、戦争の一つの場面において暴力

をコントロールし、福祉を追求し、残酷さを縮減させたことを意味している。指導者には温情と徳が、政府には国際的評価と国際法への関心が、住民には寛容があった。その継承によって次なる戦争の残酷さの縮減を、被害の記憶や反戦平和の理念によって主張するだけでなく、そうすることができる能力を示す史実によって主張する道も意識できるようになる。その意味で、板東俘虜収容所の経験は、戦争を直接に禁止してなくすというより飼い慣らすためのさまざまな技術を追求しなければならぬ現代にとって重要な経験的基盤を与えるものといえる。

注

- 1 例えば、結城（2015）のほか、日本福祉文化学会「研究・調査プロジェクト」報告（日本福祉文化学会『福祉文化研究』vol.28、2019年、58-62頁）を参照されたい。
- 2 以上のような傾向をもつ研究は年配研究者によるものと、その傾向に引っ張られた一部の若手の研究であると思われる。しかし20代後半～30代前半（研究プロジェクト開始当時～現在）の筆者の感覚では、そもそも70年前の15年戦争を戦争の代表例として選択すること自体が不可解である。そのような研究は、戦争に関する既存のイメージに寄りかかったり、研究コミュニティの内部で承認されやすい題材を選択して、既存の議論の鋳型に填っているだけではないか。筆者の世代にとっての戦争とは、日本が間接的に関与した戦後の戦争である。そのとき日本は暗黒時代であったのか。残酷な戦争が原因で福祉が追求できなかったのか。本稿ではまず社会福祉学ないし福祉文化論における戦争の観念と議論のパターンを相対化するために第一次世界大戦の俘虜取扱いを題材にしたが、別稿で戦後に日本が関与した戦争と日本人の文化を視野に含めた福祉文化論を示す必要があると考えている。
- 3 このほかにもドイツ俘虜の収容所や松江豊寿の概要を知るための文献として、林・バーディック・メースナー（1982）、横田（1993）、瀬戸（2006）、星（2006）がある。
- 4 Winter（1988=1990）
- 5 板谷（2017）169-170
- 6 例えば、林（1993）、富田（2006）、田村（2010）
- 7 田村（2010）
- 8 田村（2010）
- 9 林（1993）
- 10 林（1993）
- 11 富田（2006）
- 12 富田（2006）

- 13 林 (1993)、富田 (2006)
- 14 富田 (2006)
- 15 山田 (1998)
- 16 田村 (2010)
- 17 田村 (2010)
- 18 田村 (2010)
- 19 林 (1993)
- 20 富田 (2006)
- 21 富田 (2006)
- 22 「第九」が「初めて」演奏されたという情報がひとり歩きしていることに言及しつつ、これを検証して整理したものとして横田 (2002) がある。
- 23 田村 (2010) 61頁。
- 24 林 (1993)
- 25 田村 (2010)
- 26 田村 (2010)
- 27 林 (1993)
- 28 徳島新聞社編集局編 (2019)。現在も鳴門市で「ドイツ軒」として引き継がれている。
- 29 林 (1993)
- 30 ドイツ牧舎は船本牧舎としてドイツ村公園の南側に残っている。一時期この牧舎の2階で賀川豊彦が日曜学校を開いていたため、鳴門市ドイツ館に隣接している賀川豊彦記念館の建物は船本牧舎をモデルにしている。俘虜の解放後、牧舎の経営難もあって1926年に徳島県で酪農組合が作られたが、これは県内で初、全国的にもまれな公認の酪農組合となった (林 1993)。
- 31 林 (1993)
- 32 林 (1993)
- 33 富田 (2006)
- 34 富田 (2006)
- 35 林 (1993)
- 36 下総 (1995)
- 37 林 (1993)
- 38 林 (1993)
- 39 田村 (2010)
- 40 田村 (2010)
- 41 田村 (2010)

- 42 鳴門市ドイツ館展示「タヌキの話」(2017年11月6日筆者閲覧)。なおマイスナーは俘虜生活の余暇を利用して阿波狸合戦をドイツ語に翻訳している。
- 43 林 (1993)、田村 (2010)
- 44 高橋一家の活動や新生寮での生活については高橋 (2016) を参照されたい。
- 45 田村 (2010)
- 46 林 (1993) では感謝状、田村 (2010) では鳩時計が贈られたと記述されている。
- 47 林 (1993)
- 48 時期は定かでないが、フランクフルトのバンドー会の設立を受け、ハンブルクにもバンドー会が設立され、1972年の鳴門市ドイツ館の設立に助力した (林 1993)。
- 49 林 (1993)、田村 (2010)
- 50 林 (1993)
- 51 林 (1993)、田村 (2010)
- 52 林 (1993)
- 53 林 (1993)
- 54 1967年に大麻町は合併により鳴門市となった。鳴門市ドイツ館所蔵の物品の一部は『鳴門市ドイツ館「板東俘虜収容所」資料Web』(<http://bando-doitsu.com/ja/>) で検索・閲覧可能である。
- 55 以降、例えば、1992年にはリューネブルク市が独自に元俘虜821名の出身地紹介の調査名簿を作成したり、2001年にはリューネブルク市で日独合唱団の共演による「『第九』里帰り公園」が開かれたりしている (田村 2010)。
- 56 林 (1993)
- 57 林 (1993)
- 58 『鳴門市 ドイツ館館報』17号、2007年
- 59 徳島県の文化財 (徳島県 H P 内) <https://www.pref.tokushima.lg.jp/ippanokata/kyoiku/bunka/5020073>
- 60 100周年事業に関しては徳島新聞編集局編 (2019) を参照されたい。
- 61 松江の業績で特に評価されているのは、猪苗代湖から水を引く上水道を造ったことと、白虎隊の墓をまとめ、市民グループや軍隊の協力も得ながら多くの人々が集まれるように広場を整備したことである (田村2010)。
- 62 顕彰碑の費用は福島県の九社・団体で構成される松江豊寿記念碑建設実行委員会がクラウドファンディングで集めたものである。
- 63 なお、松江所長の人徳のほかに、松江所長の片腕であった副官高木繁の人望も特筆に値する。高木はロシア語、中国語、英語、ドイツ語など7ヶ国語を話すことができ、トラブルが起こっても俘虜と収容所の間に立って平穏な運営に貢献した。

- 64 林 (1993)、富田 (2006)
- 65 中村 (2002)
- 66 横田 (1993)、田村 (2010)
- 67 他の収容所の紹介を含めた概説は、富田 (2006)、瀬戸 (2006)、また習志野俘虜収容所に関しては習志野市教育委員会編 (2001) を参照されたい。
- 68 田村 (2010)
- 69 日本の俘虜観は「戦陣訓」の「生きて囚虜の辱を受けず」の教えに有名だが、その精神は恥の文化として古来よりのものである。これに対し欧米の罪の文化においては、自殺そのものが神の意志に反する罪であるし、敗戦しても生きて次の勝利の機会を狙うことが戦士の義務である。欧米では俘虜は恥ではなく軍務の一環であり、実際、板東俘虜収容所においてはシュテッヘル大尉が俘虜期間中に中尉から大尉に昇進している。
- 70 なお、青島戦の時点で日本は敵国ドイツと将来的に同盟を結ぶことを想定しており、これが板東俘虜収容所での処遇に基調を与える意味で影響している可能性もある。日本からすると、明治の近代化においてドイツが憲法や軍事の面で大きな貢献をしたこと、日本の陸軍の指導を1883年以降にフランスやドイツに移したことに加え、ドイツ側も青島戦に至る日本のずるさを非難する黄禍論を極力抑えようとし、交戦中にも日本と交易を続け、外交面での関係を崩さないようにしていた。両国は1930年代に相次いで国際連盟を脱退し、1936年に日独防共協定を結ぶことになるが、そのような動きの伏線を青島戦前後からみることもできる (田村 2010)
- 71 林 (1993)
- 72 林 (1993)、横田 (1993)
- 73 林 (1993) 36
- 74 林 (1993) p33
- 75 林 (1993)
- 76 横田 (1993)。
- 77 ラミス (2005)
- 78 高橋 (2016) 21頁
- 79 本稿では、第2版の徳島新聞社編集局編 (2019) を使用した。

使用文献

板谷敏彦 (2017) 『日本人のための第一次世界大戦史－世界はなぜ戦争に突入したのか』 毎日新聞出版

- Winter J M, 1988, *The Encyclopedia of the 20th Century: The Experience of World War I*, Equinox (Oxford) Ltd. (=1990, 小林章夫監訳『第1次世界大戦〔上〕－政治家と将軍の戦争：20世紀の歴史13』平凡社
- 大河内一男 (1944)『戦時社会政策論』時潮社
- 小倉讓二 (2007)『右翼と福祉－異形の“底辺にむかう志”と福祉現況へのメッセージ』法律文化社
- 孝橋正一 (1962)『全訂 社会事業の基本問題』ミネルヴァ書房
- 瀬戸武彦 (2006)『青島から来た兵士たち－第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』同学社
- 下総高次 (1995)「板東俘虜収容所における健康保険組合（日本歯科医史学会第23回（平成7年度）学術大会講演事後抄録）」『日本歯科医史学会会誌』pp.101-103
- 鍾家新 (1998)『日本型福祉国家の形成と「十五年戦争」』ミネルヴァ書房
- 関家 新助 (2017)『生存権・戦争と平和－哲学的考察』彩流社
- 高岡裕之 (2011)『総力戦体制と「福祉国家」－戦時期日本の「社会改革」構想（シリーズ 戦争の経験を問う）』岩波書店
- 高橋敏夫 (2016)『友愛の花－板東俘虜収容所物語』教育出版センター
- 田代国次郎 (2004)『苦悩する社会福祉学－反戦平和の社会福祉基本原則を守る』社会福祉研究センター
- 田村一郎 (2010)『板東俘虜収容所の全貌－所長松江豊壽のめざしたもの』朔北社
- ダグラス・ラミス (2005)「『帝国』と化したアメリカ－追従しか知らない日本」小田実・木戸衛一編『ラディカルに〈平和〉を問う』法律文化社, pp.99-145.
- 徳島新聞編集局編 (2019)『第九永遠なり－鳴門初演100年（第2版）』徳島新聞社
- 富田弘 (2006)『板東俘虜収容所－日独戦争と在日ドイツ俘虜』法政大学出版局
- 中村彰彦 (2002)「仁慈の心－保科正之と松江豊壽」『文藝春秋』80 (16), pp.22-25
- 習志野市教育委員会編 (2001)『ドイツ兵の見たニッポン－習志野俘虜収容所1915～1920』丸善ブックス
- 林啓介・バーディック・メースナー (1982)『板東ドイツ人捕虜物語』海鳴社
- 林啓介 (1993)『「第九」の里 ドイツ村－「板東俘虜収容所」改訂版』井上書房
- 星亮一 (2006)『松江豊壽と会津武士道－板東俘虜収容所物語』ベスト新書
- 山田理恵 (1998)『俘虜生活とスポーツ－第一次大戦下におけるドイツ兵俘虜の場合』不昧堂出版
- 結城俊哉 (2015)「戦争文化は、この国に何をもたらしたのか」大田昌秀・浅井春夫・植田章ほか『戦争と福祉についてボクらが考えていること』本の泉社, pp84-98
- 横田新 (1993)『板東俘虜収容所所長 松江豊壽』歴史春秋社
- 横田庄一郎 (2002)『第九「初めて」物語』朔北社

その他

出目昌伸監督『バルトの楽園』東映、2006年

鳴門市ドイツ館「板東俘虜収容所」資料Web <http://bando-doitsu.com/ja/>（最終アクセス
2019.9.17）

